

「排除の論理」ローマ帝国滅ぼす

朝日新聞 13(H25).7.24

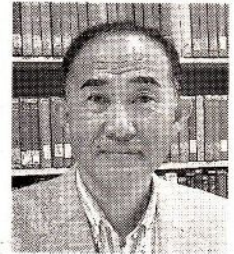
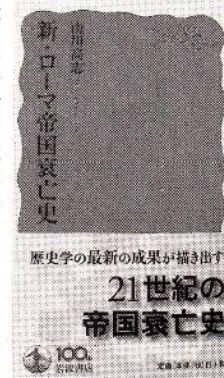
ローマ帝国の滅亡は、有力視されてきた北方のゲルマン諸族の攻撃というよりも、帝国の指導者らの中に外部の人々を嫌って排除する傾向が強まり、キリスト教も寛容さを失ったのが原因だった。京都大の南川高志教授(西洋古代史)が、現代の国際関係も連想させる、そんな新学説を提唱し、注目されている。

京大・南川高志教授が新説

紀元前8世紀に都市国家として発足したと伝えられるローマは王政から貴族共和政になり、紀元前3世紀にイタリア半島を統一。ユリウス・カエサル(シーザー)による英国主島・ブリテン島遠征などを経て帝政に移った。やがてトラヤヌス帝の2世紀初め、領土は欧州中部からアフリカ北部、中東に及び、最大になったが、内紛とゲルマン諸族の侵入で混乱し、965年に東西に分割された。

南川さんによると、ローマの国境は「限らないもの」とされ、領域意識が薄かった。先進国からみる文明と野蛮の境界でもなかった。軍の駐屯地を中心とする幅広い地帯(ゾーン)では、かなり遠方からもローマの遺物が出土していて、活力ある地域だったという。また最盛期には「ローマ人」の資格に出身地などの区別はなかった。

周辺の属州に派遣されたかなりの人数の兵士は退役後、現地に永住。



属州出身者も退役後はローマ市民権を得た。1〜2世紀の「五賢帝」のうちネルウア以外のトラヤヌスら4人はスペインなどの出身だった。指導者層である元老議員も次第に属州出身者が増えていった。

また北方のガリアから出てきたユリアヌス帝(4世紀)は興隆しつつあったキリスト教を抑え、伝統的なギリシャ・ローマ風の宗教(異教)の復活に努めたことでも知られる。つまり部族や政治、宗教、文化など多くの面でローマは相当、融通無碍だったと、南川さんはみる。しかし、4世紀後半のテオドシウス帝以降、国教となったキリスト教による異教への弾圧が始まる。この

部族・政治・宗教…寛容さ失い 人材も不足

ため、多様だった人々の結束が崩れた。これに加え、フン人、ゴート族などがガリア、イタリア半島に入る「蛮族の大侵入」も幕開け。次第に周辺の諸部族が興隆して攻勢をみせた。こうした状況に直面し、わずか30年ほどの間に強勢だった帝国は混乱期を迎えた。

外部への強い警戒心が生まれて排外的な雰囲気になり、朝廷や高官はイタリア・ローマの伝統的な貴族が主流になった。閉鎖的になれば、人材不足に陥る。429年の宮廷内対立もあってついに西ローマはさほど抵抗もできず一地方政権になった。

最盛期の寛大な思潮のもとで千年以上の歴史と史上空前の繁栄を誇った西ローマはやがて消えた。その後、長く続く東ローマとは異なり、西では名前だけになっていた皇帝が傭兵隊長によって476年、廃位されたためだ。

南川さんはブリテン島や中北部欧州などの属州も視野に入れ、近著「新・ローマ帝国衰亡史(岩波新書)」でこの新説を繰り広げている。

「私の学説はローマ帝国になぞらえて、アメリカや欧州連合(EU)、ロシア、中国のいずれかを描こうとしている、と思われるかも。でもまずは、現代社会と日本を考える視点を見つけ出してほしい」(天野幸弘)